

# 花川病院

症 例 概 要 患者：70歳代 男性

病名：右側頭葉皮質下出血

入院期間：令和3年2月～令和3年5月

経過：令和3年1月下旬、右側頭葉～被殻にかけての脳出血認め、保存的加療。

左不全麻痺、左半側空間無視、重度感覚障害、運動失調、軽度の嚥下障害が残存したまま、2月中旬、当院回復期病棟入院となった。入院当初は姿勢保持も保てないほど座位バランス悪く、夜間せん妄状態続き、昼夜のリズムも図れずADL全般中程度から重介護であった。2人暮らしの妻は膝が悪く、入院から1ヶ月目の家族面談では、施設も視野に入りたいとの言葉があった。しかし、ご本人の希望や思いを汲んだ関りの中で、運動失調や注意障害、病識の低下は残存しつつも、杖歩行、セルフケア、記憶や認識力の大幅な改善認め、3ヶ月で自宅退院となった。

## 内 容

膝の悪い妻と2人暮らし。長年漁師で生計を立てていたが、近年は糖尿、痛風の内服薬治療しながら近所の漁を手伝い、毎晩晩酌することを楽しみに過ごしていた。

令和3年1月下旬、左下肢に力が入らず、近医受診。その後徐々に左身体麻痺の進行認め急性期病院受診、画像上右側頭葉～被殻にかけての脳出血認め、保存的加療となった。

左不全麻痺、左半側空間無視、重度感覚鈍麻、運動失調が残存したため、リハビリ目的で当院回復期リハ病棟へ入院となる。入院時は、身体面座位バランス悪く、左側や左後方への崩れや右上下肢での押しつけ強く、ADL全般中等～重度介助、また環境の変化に順応できず、夜間帯の脱衣や不明言動、ベッドからの身の乗り出しでベッド柵に体をぶつけてしまうことも多く、目が離せない状態であった。

そんな中、ご本人が野球や相撲を見ている時間は落ち着いていることや、ご本人に合った車椅子を選定することで、車椅子での離床時間を確保、昼夜のリズムもつくることができ、夜間せん妄状態は改善。ご本人の言動に合わせて、早期から2人介助でトイレ誘導を行うことで、QOLを高められる関りを行い、夜間の脱衣行為も消失。また、当初は摂取速度や咀嚼不十分でむせこみが多くみられていたが、「自分で食べたい」という思いを汲み、食形態の工夫や自助具、位置を工夫することで、自力で安全に食事ができるようになり、栄養状態の改善につながった。

入院当初からウェルウォークも取り入れ入院1か月半経過で座位、立位バランス、感覚障害改善し、歩行訓練を多く取り入れられるようになった。また、職員や他患との関りやご本人が好む新聞を読む環

境を整えることで日課や時事理解が進み、記憶、見当識も大幅に改善した。

入院2ヶ月半経過となると、病棟内でも見守りにて杖歩行開始、左側への傾きが改善していった。運動失調や感覚障害、注意障害、バランス能力低下は残存しているものの、歩行ADL改善したことで、自宅退院の思い強くなり、入院から3ヶ月で自宅退院となった。

ICFの視点からご本人の意思決定の思いを汲み、自分らしい生活を送ることが出来るようチームで支援した症例であった。今後も患者さんの意思決定を支え、退院支援していきたい。

入院時FIM 運動項目25/91点 認知項目15/35点 計40点

退院時FIM 運動項目67/91点 認知項目24/35点 計91点